

教員・保育者をめざす大学生の自己理解 (2) —エゴグラム実施半年後の事後調査—

○小嶋玲子 (桜花学園大学)

河内晴美 (元桜花学園大学)

キーワード: エゴグラム, 自己理解, 大学生

目 的

本研究は、大学3年時に実施したエゴグラムで、自覚した「気づき」(小嶋・河内 2016)をどのように実行しているかについて、半年後の事後調査の結果を分析する。

エゴグラムの先行研究については、結果から学生の心理的特性を把握する内容(河島 2012)、学業的延引行動とエゴグラムの自己状態との関係の研究(龍ら 2013)等はあるが、本研究のように実施後の事後調査を分析した研究は見当たらない。

方 法

調査時期: 201X+1 年 4 月

調査対象: 教員・保育者養成大学4年生 131人
事後調査: 大学3年時に実施したエゴグラムのワークシート結果を各自に再配布し、半年間の生活を振り返る。この間の講義やゼミで、エゴグラム結果の実践等について尋ねることはなかった。
調査項目: A エゴグラムで自覚したことを実行したか。B 実行した内容。C 実行しなかった理由。D エゴグラムを体験して役に立ったと思うか。
倫理的配慮: 個人が特定されることはないことを伝え、結果を発表する旨の了解を得た。

結果・考察

問A「自覚したことを実行しましたか」

調査対象者131人の内 有効回答数129(98.5%)であった。a しっかり実行した4人, b 実行した46人, c あまりしていなかった69人, d 全くしてなかった10人で, a+b の50人(38.8%)が実行し, c+d の79人(61.2%)が実行していなかった。

問B-1「実行した時・場所・場面」

どのような時・場所・場面等で実行したかについて、肯定的な回答をした50人の複数回答92を類別した。大学生活(ゼミ14, 委員会やクラブ等13, 大学の授業10)での実行回答が37, 大学以外の生活(アルバイト18, 家庭生活11, 友人関係7, ボランティア2, 日常生活2, 採用試験1)での実行回答が41, 保育園や幼稚園の実習等での実行回答が14であった。

問B-2「実行した内容」

記述を筆者らでKJ法により分類し, 表1

自分を見直して行動するようにした	17
自分の意見を相手にわかり易く発言するようにした	8
相手の立場に立って話を聞き発言するようになった	8
計画的に行動するようになった	5
自分に厳しく向き合うようになった	5
自分の長所を生かし、欠点を直すように心がけた	4
ニュースや新聞を読んで社会の出来事に目を向けた	3

に示した。3年時に読み解いた「気づき」に対し

て、自分の行動を見直したり、相手に分かり易く話をしたり聞いたりしている等と記述している。

問C「実行しなかった理由」

実行しなかった79人の理由(複数回答86)は、自覚した内容を忘れていた59, エゴグラムをする前から分かっている内容だった8, 気にならないほどの小さいことだった6, 実際の場面で急にはできない6, 今の自分でもいい4, 意識していたが出来たかどうか不明2, 自覚した内容がやりたくないことだった1, である。

問D-1 クロス集計「問D エゴグラムが役に立ったか」と「問A 実行したか」について表2に示す。

実行したと回答した50人は、エゴグラムが「とても役に立った」

	役に立った	とても役に立った	役に立たなかった	合計	%
自覚したことを実行したか					
a しっかり実行した	4	0	0	4	3.0
b 実行した	20	25	1	46	35.7
c あまり実行していなかった	*8	*53	8	69	53.5
d 全く実行していなかった	0	*5	5	10	7.8
合 計	32	83	14	129	100

N=129 ※全く役に立たなかったは 0人

(a+b24人)・

「役に立った」

(b25人)とし、

実行していなか

ったと回答した

79人の内、66人(表2*)が実行していないにもかかわらず役に立ったと回答し、内訳は、「とても役に立った(c*8人)・「役に立った(c+d*58人)」である。この記述を個別調査し, 表3に示す。

	とても役に立ったと思う(8人) 人数	役に立ったと思う(53人) 人数	役に立たなかったと思う(5人) 人数
いあ	改めて自分について理解できた	自分の性格を改めて理解することが出来た	な全
なま	自己分析ができた		か
かり	自分ができていることでできていないことが分かった・自己理解が深まった	自己理解が大切と思った	く
つ美			つ
実行			実
した			行
し	今後の課題に関すること	今後の課題をもつことができた	し
て			て

問D-2「実行していなかったが、役に立ったと回答した記述」 個別調査の結果、エゴグラムで自覚した気づきを実行していなかった*66人(表3)が、半年後に当時のワークシートを見る機会を得て、改めて自己理解を深めたり課題を思い出したりして「役に立った」と記述したことを把握した。

課 題

エゴグラム実施後の自覚を、大学生活・実習・アルバイト等で活かす経験を交流する機会を設定し、より自己理解を深める可能性を追究する。

参考: 小嶋・河内(2016)日教心第58回総会発表論文集 PB73, 川島真(2012)尚美学園大学芸術情報研究第21号 pp37-47, 龍祐吉・小川内哲生・河野順子(2013)日教心第55回総会発表論文集 p377